師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18856341

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻, ♡喘ぎ, 男性妊娠, 妊夫姦

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の６話目です。男性妊娠、妊夫姦描写があります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます～！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ワンナイト・ホラー　6

〜Sideエクボ〜

結局今日もワンナイトに出やがって。
呆れながらシゲオと芹沢と３人でファミレスで２人の様子を伺う。
「みーくんだ」
憎々しそうに芹沢が呟く。
「あいつ、こんな時間に師匠を呼び出して、下心みえみえじゃないか。それで来る師匠も師匠だ」
イライラしながらシゲオがドリンクバーのコーラをすする。
ちっ、霊幻の隣に移ってイチャイチャと……見てて気分がいいもんじゃあねぇな。
あ。
みーくんが動いた。
よし、霊幻のドリンクを持ってる。
隙を見てアルコールを入れさせてもらおう。催眠の効きが良くなる。
俺はドリンクバーのお代わりを取りに行くフリをして、そっと手を伸ばして、２人のグラスにそれぞれ数滴スポイトからアルコールを……入れようとした。
「おい、何してる」
が。
みーくんに手を掴まれて舌打ちした。
「グラスに何入れた？」
袖に仕込んでいたスポイトを奪われて、中身を確認される。
「酒か。霊幻さん狙いだな？」
くそっ、コイツ鼻が効く。伊達に遊んでねぇな。
「店員さんに警察呼んでもらうから、覚悟しろよ。すみませ……っ」
みーくんのアゴをがっと掴んで、目を睨み付ける。

「いいか、『今のは、何でもない』」
強い催眠をかける。
が。
「う……っ！」
みーくんは頭を押さえて苦しみはじめた。
「おまえ……っ、今の、何……っ」
「おどれぇたな。お前さん、霊力持ちか」
能力者に洗脳は効きにくい。
「あいつ、能力者を引き寄せるフェロモンでも出してんのか？まあいい、芹沢、手ぇ貸せ」
「なんだよ」
コワモテの男２人に囲まれたみーくんは覚悟を決めて俺たちに殴りかかってきた。
敵意に反応した芹沢が反射的にみーくんを蹴り飛ばす。
「お？暴力で来んのか？いいねぇ、霊幻をかけて決闘といこうじゃねぇか」
「２対１で何が決闘だよ……」
「うるせぇ、俺様が１人で相手してやるさ。シゲオ、霊幻は任せたぜ。やり方はもう分かっただろ？」
頷いてシゲオはアルコール入りの飲み物を持って霊幻の隣に行く。
「やめろ……霊幻さんに近付くな……」
「霊幻の身体目当ての娑婆僧が、一丁前にナイト気取りかぁ？悔しかったら俺たちを倒して助けに行くんだなぁ。オイ、オモテ行くぞ」
みーくんを引きずりながらファミレスの外に出る。
ファミレスの店員は見て見ぬふりをしてくれた。いやあ、助かるねぇ。
芹沢に見張っててもらいながら、路地裏で『決闘』する。
まあ、俺様の敵ではなくて。
みーくんはゴミ捨て場で動けなくなった。
「ま、これに懲りたら２度と霊幻に近づかないこったな。ヤリたいなら他をあたれ」
「違う……俺は、霊幻さんが……」

「──あ？」
俺はみーくんの前髪を持って持ち上げる。
「ならなおさらアイツはお前の手には負えねえよ。なんたって俺たちがいるんだからな。何の力もないお前じゃ無理だ」
もう一度ゴミ袋の上に放り投げる。
「あきらめろ」
「うっ……ううっ……」
みーくんが泣き始める。あーうぜぇ。
膝を抱えて泣き続けるみーくんを置いて、俺たちはシゲオの気配を追った。

※※※※※

〜Sideみーくん〜

「う……」
朝の光に照らされて目が覚める。
「いつっ……」
身体中が痛い。でも折れたりはしてないようだ。
──手加減された。あいつ、相当の手練れだ。
「ちくしょう……」
霊幻さん……。
ぶわ、っと涙が出てくる。守れなかった。あれだけ世話になった人を。
「うっ、ううううっ……」
あいつらにどんな目に遭わされたのか、考えたくもないのに、容易に想像がついてしまう。
ハメ撮りされて、マワされて。
きっと人生をおしまいに、された。
「霊幻さん……きっと、きっと、助けるから」
霊幻さんにはさんざん助けて貰った。次は俺の番だ。
「よい、しょっと」
立ち上がって歩き出す。まずは何からするべきだろうか。

ふと、「日輪霊能事務所」の看板が目に入った。霊幻さんと同業者か。
……情報収集しやすいかもしれない。
「すみません、誰かいますか」
「はいはーい」
人の良さそうなオジサンが出てきた。
にぱっ、と俺は人懐っこい笑顔を見せる。
「弟子入りしたいんすけど」
「で、弟子入り？」
「知り合いの霊能力者を助けたくて。俺も霊力？があるらしいし、修行したいんすよ」
「弟子は取ってないんだが……ちなみにその霊能力者って誰だ？」
「霊幻新隆っていうんですけど」
オジサンの顔色が変わる。
「……詳しく話してみろ」
オジサンは森羅万象丸、と名乗った。

※※※※※

〜Sideエクボ〜

ホテルの近くの明け方までやってるラーメン屋でシゲオを待つ。
俺様は気怠く新聞をめくり、芹沢は椅子に座ったまま仮眠してる。
人のセックス待ってる時間ってのはこの上なく無為徒食だな……。
「ぐっ！？」
と。
突然、大量の霊素が失われる。
──呪い返しを喰らった。
「シゲオのヤツ……っ俺の呪いを壊したな！？」
おおかた情事の最中にみーくんと呼ばれるのに嫌気でも差したのだろう。まったく、無茶してくれる。
軽い呪いだから反動も軽いとはいえ、コツコツ貯めてきた霊素が勿体ねぇっつの。

ダメージの修復をはかっていると、シゲオが霊幻とホテルから出てきた。
……青い顔をして。
「どうした、何があった？」
芹沢を連れて出てきた俺がそう言うと。
きゅ、と霊幻が俺の手を握ってきて、飛び上がった。
「な、な、な、何だよ突然！」
「えくぼ、迎えに来てくれたのか？」
ふわり、と愛らしく俺に笑いかける霊幻。
「……嬉しい」
はにかむ姿は花が咲くようだか、明らかにおかしい。
「芹沢も、ありがとな」
「！？！？！？！？」
芹沢の首に抱きついて頬擦りする霊幻に固まっている。
可愛くて破壊力がヤバい。
が。
「おい、見せてみろ」
「うん、分かった」
霊幻の目から内部を視る。
意識がほとんど無ぇじゃねえか。呪いが霊幻の行動を支配してるような状態だ。
「えくぼ？」
ふわふわ笑う霊幻は。
ただのお人形さんだ。
「芹沢がかけた呪いだな。『俺たちと恋仲になる』ってのは霊幻の意識がある状態じゃ駄目だったから、意識まで落とされてる。……満足かよ、芹沢」
シゲオは真っ青になっている。これは霊幻じゃない、と１番感じているのだろう。
「……いいじゃない。これで霊幻さんは俺のものだ。霊幻さん」
芹沢が腕を広げると、その中に収まる霊幻。
「……芹沢さんだけのものじゃない。『僕たちの』師匠でしょう？」

ぐいっとシゲオが霊幻の腕を引く。
「なんだなんだ？ケンカするなよ。大丈夫だ」
──３人まとめて相手してやるよ。
ささやく瞳は魔性の輝きをしている。
人形だと分かっていても。
そのお誘いにはくらくらした。
「だめだよ、師匠身重なんだから、無茶しちゃ」
シゲオが発した言葉に芹沢と俺が目を見開く。
「条件、満たしたのか……！？」
「うん。僕の呪いも発動したよ。『霊幻新隆は、子を宿せる身体になるよう、呪う』」
事態を飲み込めていない霊幻がにこにこ笑っている。
「師匠、まずは僕の子供を身籠ったから、危なく無いように見張らないと。意識もあんまりはっきりしてないみたいだし……」
「……マンション借りて、４人で暮らそう」
俺様はしぶしぶ切り出す。
「誰かが霊幻についてた方がいい。でも、２４時間つきっきりってのは不可能だ。相談所もあるしな。俺たちで交代で見張るために、一緒に住んだ方が効率的だ。……それでいいな？」
「なんで、そこまで」
「なんかの弾みで呪いが解けたり、正気に戻ったりした瞬間に、自害しない保証がねぇからだよ」
気が付いたら弟子のガキ身籠ってるんだぞ。
パニックになって何するか分かったもんじゃねぇ。
「……分かった」

こうして俺たちは相談所からほど近い古めの大きな間取りのマンションを借りて、霊幻と暮らし始めた。
霊幻は俺たちの言うことをなんでもきく。

だから安定期に入ったら。

「あっ♡ああっ、あぅっ♡」

当然、こういうことになった。
今日は芹沢が霊幻を抱いている。
「霊幻さんっ、霊幻さん……っ」
ぱんぱんと腰を打ち付ける音が響く。
「せりざわぁっ♡そこイイっ♡もっとゴシゴシしてぇっ♡」
甲高い霊幻の声はよく響く。
「霊幻さん……もっと可愛らしくおねだりしてくださいよ……」
「せりざわのおチンポっ♡もっと俺にちょうだいっ♡♡」
はぁはぁと２人の呼吸音が激しくなる。
「イくっ……♡せりざわっ、ぎゅってして……♡」
「霊幻さんっ……」
ひときわ激しい抽送音がして。
「ああっ……♡」
「うっ……」
終わったらしい。
ゴソゴソと片付けをする音が響く。
霊幻の部屋から顔を出した芹沢に。
「セクサロイドの具合はどうだ？」
そうからかうと睨まれた。
「霊幻さんをそんなふうに言うな」
ふん。
おまえが作り出したんだろうがよ。

妊娠も６ヶ月、中期になって。

「もぶぅっ♡激しくしたら赤ちゃん驚いちゃうからあっ♡」
俺たちはすっかり霊幻とのセックスにハマっていた。情けねぇ。
「師匠はママなのにこんなに淫乱で恥ずかしいですね。子供に悪いと思わないのですか？」
今はシゲオがお楽しみ中だ。
「んぁっ♡ごめっ、ごめんなさいっ♡♡えっちなママでごめんなさいっ♡♡」
ぐちゅぐちゅと水音が響く。

シゲオが霊幻の性器を掴むと、甘い悲鳴が霊幻の喉から漏れる。
「せっかくパパにもなれるようにしてあげたのに、残念ですねぇ、師匠？」
「おっ♡おれっ♡モブの赤ちゃんのっ♡ママになれてっ♡幸せだもんっ♡」
シゲオの動きが止まる。
「……っ、アンタって人は……！」
パンパンと打ち付ける音が激しくなる。
「あ……っ、イっ……、〰〰〰〰〰〰っ♡♡♡」
霊幻がだらしない顔をさらしながらメスイキした。
「はぁっ、はぁ……」
ゆるゆると腰を動かすシゲオももう出したのだろう。
そう。
人形になった霊幻は俺たちに都合のいいことを言い続けてくれる。
それがたまらなく心地よくて。
頭の中で警鐘がガンガンなっていた。

妊娠８ヶ月。

「あ……っ、じれったい……っ♡」
腹の子を刺激しないように、ゆっくり腰を動かす。
「あーーーー……っ♡」
それはそれで性感が刺激されるらしい霊幻は、ひくひくと媚肉を痙攣させる。
「気持ちぃか、霊幻？」
ゆったり抱くのもいいもんだ。
「うんっ♡も、イク……♡」
ピクピクピク、と震えて霊幻がダラダラと射精する。
「……っ」
ナカのうねりはすごくて、俺様は思い切り搾り取られた。尾てい骨が痺れる。
そのうねりに。
不服そうに、赤子が腹を蹴った。

ドン。

ぶわ、と霊幻の身体から文字が追い出される。

ドン、ともう一度蹴って。

ビキビキビキ！と大きな音を立てて文字にヒビが入って。弾けて霧散した。

「ぐあああああっ！！」

芹沢の悲鳴が聞こえてくる。
呪いが、破られた……！？
改めて霊幻の腹を見る。腹の子はシゲオの子だ。強力な能力者である可能性があった。そして、今それを証明した。……内部から呪いを返すことによって。
「……おい、いつまで挿れてんだよ」
俺様は霊幻の低い声に飛び上がった。

身支度を整えた霊幻はベッドに設置した三角クッションにもたれかかりながら、腹を少し撫でる。
「全員集合な」
その額にはあからさまに青筋が浮かんでいた。
ま、まあ、取り敢えずパニックにならなくて良かった……流石霊幻だぜ。
俺様、シゲオ、右腕がありえない方向に曲がった芹沢が霊幻のベッドの前で正座した。
「なるほど、芹沢のかけた呪いで意識がなくなってたわけか。で、どうも腹の子が呪いを破ったらしくて、意識が戻った、と」
愛おしそうに霊幻は膨らんだ腹をなでる。
その光景にほんわかしてる場合ではない。
「芹沢のその腕は呪い返しのせいか」
「おそらくな」

「そうか。話が終わったら病院に行けよ」
今、行かせる気はないらしい。鬼だ。怒ってるんだろう。当然か。
「この子はモブの子で、今妊娠８ヶ月、か。……なるほど分かった。相談所は？」
「俺たちで回してる。あと覚えないかもしれないけど、お前も出勤してた」
「それなら一安心だな。さてと、じゃあ、母子手帳見せてくれ」
シゲオと芹沢と顔を見合わせる。
「……なんだ、それ？」
「は？取ってないのか？じゃあ妊婦検診どうしてたんだよ」
「にんぷけんしん？」
びき、と霊幻の青筋が増える。
「馬鹿野郎、腹の子や俺に異常があったらどうすんだよ！！妊婦検診行かせないのはＤＶだからな！？今すぐ役所に行って母子手帳取って、病院行くから手伝え！！」
慌ててタクシーを手配したり服を準備したりする。
「ししょう、知らなかったんです。こんな色々必要だったなんて……」
「あーはいはい。分かったから支えてくれ。歩きにくくて仕方ねぇよ」
芹沢は病院、俺とシゲオは役所と、そこで紹介された大学病院に付き添った。
「……ったく、ベビー用品も全然揃えてねぇし……もう妊娠後期だから、妊婦検診は毎週だからな。毎回誰か付き添えよ」
こくこくと俺たちは頷く。
「師匠、あんまり怒ってない……？」
ひそ、とシゲオが俺に耳打ちしてくる。
「……っぽいな」
子供がもう産まれてもおかしくない月齢になってるからかもしれない。諦めて俺たちと家族になることを選んだのだろう。
それからは穏やかなマタニティライフを過ごして。
「師匠、今週末はこのレストラン行ってみませんか？みんなでデートしましょうよ」

「んー？それも悪くないなぁ」
赤子の靴下を編みながら霊幻が返す。
この上なく幸せを感じていた瞬間。
チャイムが鳴らされて。
「影山茂夫さん、吉岡守さん、芹沢克也さんはご在宅ですね？」
警察手帳に固まる。
「……ああ。揃ってる」
霊幻が壁にもたれながら警官に応える。
「霊幻新隆さんへの暴行、監禁容疑で逮捕します」
シャカン、と俺たちの手に手錠がかけられる。
「ごめんなぁ」
くす、と霊幻が微笑う。

「次のデートは法廷だ」

続